

ごあいさつ

2023年度の『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』を刊行いたします。本研究紀要も今号で第46集となりました。これからも、和歌山大学教育学部の附属学校として、一層研究を深め、教育実践を重ねてまいりたいと思います。

さて、経済協力開発機構（OECD）は、子供たちが2030年以降も活躍するために必要な資質・能力について、2019年5月に、ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030を発表しました。その中で、子供たちがウェルビーイング（身体的・精神的・社会的にも持続的に良好で調和のとれた幸福の状態）を実現していくために、「自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力」を身に付けることの重要性が指摘されています。そして、その力は生徒エージェンシーと定義されています。

本校では、本年度その生徒エージェンシーに着目し、一人一人が必要な場面で生徒エージェンシーを發揮できる子供の育成を目指し、各教科からせまっていくこととしました。そこで、研究主題を「生徒エージェンシーの發揮に向けた各教科からの接近」（1年次）と設定して、各教科の学びの中に潜んでいる生徒エージェンシーに繋がる学びをカリキュラムとして意識化し、どのように学びを展開できれば、生徒エージェンシーの發揮に繋がる素地となる力を身に付けることができるのかを明らかにすべく研究を進めています。

具体的には、教師が教科の本質を考え、教科の本質にせまる授業を単元レベルで構想し、併せてそのための「しかけ」を構想し、授業で実践を行い、子供たちの学びの姿をもとにリフレクションをし、生徒エージェンシーの發揮に繋がる姿を記録したり、効果的なしかけを蓄積したりしています。そして、これらの取組を年間を通して繰り返し行いながら研究を進めています。また、リフレクションの中で、「子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」、「他者と協働しながら自分自身の学習プロジェクトや学習過程を計画する一人一人にカスタマイズされた学習環境」、「しっかりと基礎力をつけること」という、生徒エージェンシーの發揮を可能にするための3つの要素と各教科との関わりについても検証しています。本研究を進めるにあたり、本年度は、国立教育政策研究所総括研究官の千々布敏弥先生にご指導を賜っております。

本研究紀要では、2023年10月に開催しました教育研究発表会をはじめ、校内研究授業等、本年度の本校の研究の成果と課題を掲載させていただいております。ご高覧いただき、皆様方から様々な角度から忌憚のないご意見を賜ることができれば幸いです。

最後になりましたが、千々布敏弥先生をはじめ、本校の教育・研究活動の推進にあたり、ご指導、ご助言を賜りました多くの皆様方に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学校長 南 正 樹